白金薮

二月号

平成 25 年 2 月発行　第 24 号

白金葭定例句会案内

三月十五日（金）12：00～15（アビスタ第5学習室）
兼題：受験、春の水
四月十九日(金) 12：00～15：00(アビスタ第一和室)
兼題：枝垂桜、蜂
五月十七日(金) 12：00～15：00(アビスタ第5学習室)
兼題：

受験、春の水の参考句（三月十五日分）

真四角な消しゴムをのせ受験票　森田公司
受験期の夜や突然にジャズ鳴らし　山崎ひさを
喫茶店いつもの席のッ受験生　関口美子
あの窓の受験の灯り終りけり　向井貞女
受験生猫を抱へて歩きけり　小島良子
首出して湯の真中に受験生　長谷川双魚
春の水山なき国を流れけり　与謝蕪村
一つ根に離れ浮く葉や春の水　高濱虚子
春の水とは濡れてゐるみづのこと　長谷川櫂
春の水岩を抱いて流れけり　夏目漱石
春水と行くを止むれば流れ去る　山口誓子
流れに沿うて歩いてとまる　尾崎放哉

月例句会報（12／2／15 9名 欠投句1名兼題：鱶、寒明け）

ヴァレンタインディ眉頭白加へ　飯田孝三

春は曙 漸（やうや）う一句屁めく
スカイツリーの手前を返す春マラソン
鱶ノ鮨が好キデスファスト・キッス
寒明けの目をみひらひて三千グラム　増田陽一

擦れ違ひたるは鱶のごときもの
寒明けて鴉の声がやゝ黄なる
爆竹の煙も混り杉花粉
年越して鳴く蟋蟀の幽かなり
寒明けの骨組み厳し筑波山　増田悦子

寒明けや去年よりとまる腕時計
透明に眼あかるき鱶かな
ライザミネリ炬燵の猫は落ちつかず
豆撒くも忘れて春の立つといふ
鬼やらひ高階に声ひそかなる

光成高志

ずらり頭の並ぶ鱶の簾干す
青空に刷毛雲ちぎれ寒明くる
はとバスのずらり並びて寒明くる
団十郎亡くなり寒の明けにけり
寸鉄に似たる鱶を焼いてみる

光　みち

鯵鰯少しはなれて鱶売る
江戸川の中に池あり　鵲鷏（かいつぶり）
病む父のこれが最期か鱶汁
寒明けや笑みの三尊円空展
寒天やハンガー束ね鴉の巣

杉浦弥栄子

寡黙にし方位計見つ恵方巻き
バレンタインデー郵便の来ぬ一日
寒明ける海はのったり光りける
春隣泥田の鳥はまだ白し
男の子海を叩いて細魚釣る

青木啓泰

日向ぼこ黙っているのは怠け者
騎士のように泳ぐ鱶見し月夜
銀河系までゆく気の鱶捕えらる
寒明けといえども堅い門戸
寒明けの田んぼの隅ゆるんでいる

吉羽多美子

寒明けの月犬小屋の上にある
寒明けのみくじ大吉授かりて
寒明くる親亀子亀甲羅干し
寒明くるなほしばらくは生きたしと
鱶てふ名の良しまして姿よし

寒明けし水車の緩み速みかな　松村幸一
日脚延ぶからくり時計一踊り
にぎやかに揚げ物あがり寒明けぬ
鎌倉や五山筆頭春障子
彩玻璃の花鳥が宿す春日かな

水仙の香りがつづく山の道　浅野正美
青空に福が宙舞ふ節分会
ひしめきて両手突き上げ豆つかむ
ひさびさに名前で呼ばれ初句会
幼な児がペダルこぎ初む寒の明け

選句結果（数字は入選数）

6　騎士のように泳ぐ鱶見し月夜　啓泰
5　銀河系までゆく気の鱶捕えらる　〃
5　寸鉄に似たる鱶を焼いてみる　高志
4　寒明けや去年よりとまる腕時計　悦子
3　幼な児がペダルこぎ初む寒の明け　正美
3　寒明けの月犬小屋の上にある　多美子
3　鯵鰯少しはなれて鱶売る　みち
3　にぎやかに揚げ物あがり寒明けぬ　幸一
3　団十郎亡くなり寒の明けにけり　高志
3　寒明けの田んぼの隅ゆるんでいる　啓泰
2　寒明けて鴉の声がやゝ黄なる　陽一
2　寒明けといえども堅い門戸　啓泰
2　バレンタインデー郵便の来ぬ一日　弥栄子
2　寒明くる親亀子亀甲羅干し　多美子
2　鎌倉や五山筆頭春障子　幸一
2　爆竹の煙も混り杉花粉　陽一
2　はとバスのずらり並びて寒明くる　高志
2　寒明けの骨組み厳し筑波山　陽一
2　擦れ違ひたるは鱶のごときもの　〃
1　男の子海を叩いて細魚釣る　弥栄子
1　ヴァレンタインディ眉頭白加へ　孝三
1　日向ぼこ黙っているのは怠け者　啓泰
1　春隣泥田の鳥はまだ白し　弥栄子
1　寒明ける海はのったり光りける　〃
1　スカイツリーの手前を返す春マラソン　孝三
1　ずらり頭の並ぶ鱶の簾干す　高志
1　寡黙にし方位計見つ恵方巻き　弥栄子

1　寒明けや笑みの三尊円空展　みち
1　豆撒くも忘れて春の立つといふ　悦子
1　青空に福が宙舞ふ節分会　正美
1　寒明くるなほしばらくは生きたしと　多美子
1　寒天やハンガー束ね鴉の巣　みち
1　青空に刷毛雲ちぎれ寒明くる　高志
1　水仙の香りがつづく山の道　正美
1　鱶てふ名の良しまして姿よし　多美子
寒明けし水車の緩み速みかな　幸一
寒明けの目をみひらひて三千グラム　孝三
鱶ノ鮨が好キデスファスト・キッス　〃
鬼やらひ高階に声ひそかなる　悦子
日脚延ぶからくり時計一踊り　幸一
ひしめきて両手突き上げ豆つかむ　正美
ライザミネリ炬燵の猫は落ちつかず　悦子
病む父のこれが最期か鱶汁　みち
寒明けのみくじ大吉授かりて　多美子
ひさびさに名前で呼ばれ初句会　正美
透明に眼あかるき鱶かな　悦子
年越して鳴く蟋蟀の幽かなり　陽一
江戸川の中に池ありかいつぶり鸕鷀　みち
彩玻璃の花鳥が宿す春日かな　幸一
春は曙やうや漸う一句屁めく　孝三

一句鑑賞

寒明ける海はのったり光りける　光成高志
弥栄子

ここ十年毎年のように伊豆高原の大室山下の自炊マンションに寒明けの週に行ってきた。大室山の山焼きを見るのが目的であったが、決まった日には行われない。兎も角も、火口丘に登って東伊豆の海を見る。掲句のような海が春光を反射してのたりのたりかなである。寒が明けたなあとの感慨がおこる。麓の某氏は広い庭に花を一杯咲かせ、東京から移り住んでいる。家具を売って儲けたおばちゃんは、二階建てＲＣのビルに一杯人形などを詰め込んで皆に見せている。ごてごてして品がよくない。周りは金縷梅が咲き、また酸っぱい蜜柑がごろごろ落ちていたりする。寒明けの海はいつも東伊豆の海を思うのである。作者の海はどこであろうか。

擦れ違ひたるは鱶のごときもの　陽一

鱶のごときものとはどんな人或いは物であろうか。読者任せである。鱶を知らなければ、鑑賞が出来ない。すれ違ったのだから、人であろう。鱶のごときものと投げ出して、読み手の想像力に委ねる。こう

いう俳句の作りかたもあるのだ。細身の銀白色の飛魚科の鱶であってみれば、あっと思う間に離れて行った人である。誰だったか、鱶の如き身のこなしの速い紳士を想像する。すれ違ってそれっきりの人は誰にでもある。

騎士のように泳ぐ鱶見し月夜　　啓泰

前句の鱶のごときものはこの騎士のような紳士であったのだ。掲句も選んでその時は気づかなかったが、今はそう思う。掲句は剣を持った武士ならで騎士のように泳ぐ鱶を月夜に見たのだ。水面近くを泳ぐ細見の下顎の尖った鱶の月光に光る姿を瞬間把握したその記憶を定着させた佳句。

寸鉄に似たる鱶を焼いてみる　　飯田孝三　高志

寸鉄は短刀、短剣。細見、銀の鱶から、はたと、鋭利な刀身を連想したのだ。古く、刀工は白装束に身を清め、真赤に焼いた鉄を火花を散らして鍛え、水に冷しては、又鍛える。かくして名刀はできあがる。「スンテツニニタル」の響きは重々しく、どこぞ刀剣づくりの厳粛な気に通う。一転、「サヨリヲヤイテミル」の調べはぴちぴち、滑らか、しなやかな魚身を髣髴させる。焼きゃ鱶も火花を散らす？いやいや、白身、淡白、さんまとは違う。はてさて、姿態音律の相似対照を織りまぜ、機知はずむ、飄逸の一句である。尾「みる」の軽妙なタッチがさわり、臍である。

鯵鰯少しはなれて鱶売る　　みち

魚市場（魚屋）の店頭風景である。鱶は鯵鰯と同じ“青魚”だが、白身、味は淡白、逸品は、刺身、鮨種として珍重され、鯵鰯が庶民向きなのに対し高級魚のイメイジがある。卸先は高級料亭、老舗の鮨店等が主か。「少しはなれて」が両者の属性の違いを暗示し、諧謔を洩らす。ひら仮名の綴りもゆき届き、「売る」が売場の人声、市場の賑わいを巧まず取り込む。只の店頭描写ではない、世のなりわいの様を目に見せるのだ。「寒明けや笑みの三尊円空展」も、「や」が利き、「笑み」が春光を湛え明るい。「サンゾンエンクウテン」が力強い春の足取りを伝え、その響きは、円空仏の荒削りな木肌にも通う。

豆撒くも忘れて春の立つといふ　　悦子

立春、そうだ昨日は節分、豆撒きするのを忘れてた。昔、田舎では、近所とはいえ、かなり、離れた家々から豆撒きの声が聞こえてきた。時移り、世は変わる。下町でも、「福は内、鬼は外・・」を聞く事

は珍しい。自分でも、余り気にかけてないせいだろうか。とまれ、月日は容赦なく過ぎる。自ずからの調べにのせる情懐は深い。〜と「いふ」の気息の妙がさわり。

水仙の香りがつづく山の道　　正美

道すがら水仙の香る山道を行く。水仙といえば香りだが、敢えて「香り」を言い、香気の空間を取り込んで、視線を「道」に絞りこみ、坦々、山の道形を目に見せる。文理を超えた修辞効果だろう。中七、〜「が」がさりげなく香りを引き立てる。これが「の」だったら、水仙は萎れる。平明、情趣に富む。梅も香り、「むめがゝにのつと日の出る山路かな」(芭蕉)、同じく「香」をいう。

貴句断層Ⅳ（23号分）　　武者昭七

瑠璃褪せぬやうに閉じてゐる冬の蝶　　陽一

寒さに耐えて羽根閉じてじっと葉の陰に身を寄せている冬の蝶。作者はそんな蝶に驚きと慈しみの目を注いでいる。作者の瞼のうちにはもう既に明るい春の光の中を瑠璃の羽根鮮やかに舞う「春の蝶」が飛翔している。じっと羽閉じたさまに「それはわが身の瑠璃の色褪せさせぬためヨ」とばかりの蝶のやさしくも強固な心情を作者は読みとっている。

スカイツリーを股挟み出初かな　　孝三

東海道を下る時には列車の右端に席をとることにしている。富士山が見えるからである。そして決まって「ああ、富士が見える」と声に出していってしまう。近頃はスカイツリーである。「あツ、スカイツリーだ！」という具合だ。高いうえにスマートなのが人気なのだろう。そんなツイｒーを股に挟んで負けてはならじと出初式の粋なお兄さんが高い梯子のてっぺんで逆立ちして見せる。股に挟みこまれたスカイツリーもおとなしく見惚れている。句に力があって江戸っ子の心意気がにじむ句である。「股挟み」は股バサミと濁音で読みたい。

名前ある犬と猫にもお年玉
紅白歌合戦ＳＭＡＰとりを取る年に　　みち　高志

こうしてお二人の句を並べてみるとさすがに時代の流れを感じて「そうなんだなあ」としばし感慨にとらわれてしまう。ペットを子供の名前で呼び「うちの子」といい賀状に並んで顔だしたり、演歌の女王とやらが消えて代わりに元気に跳んだり跳ねたりのかっこいいお兄さんがたが紅白の「とり」をとる時代に　なったのである。時代は確かに流れている。

取り残された昭和一桁はしみじみと思いにふけるのみというわけである。

（２０１３／０１／３０）

ハガキ句管見（第二十四報）　飯田孝三

昆虫記開いてありし春の昼　敏子

身近な“ありのまま”に感じ、“ありのまま”に伝える。できそうで、できない。あたりまえの些細に宇宙の本心を知る。“ありのまま”の素直な気持ちがなければできない。目から鱗が落ちる気がした。

春の日がさしこむ、昆虫館玄関脇の小卓に初版本とも思える、『昆虫記』の原著が開かれている。目にした瞬時に授かった句だろう。同館は鴎外旧居「観潮楼」へ坂を歩いて四、五分、鴎外漱石ら縁りの文京区千駄木にあり、辺りは「文士村」の面影を止め、いたって静かである。昆虫館は、休日のその日、明るく、のどかで、たおやかな「春の日」であった。中七～あり「し」の静穏がいい。そこで、半拍おいて読みたい。

ファーブルは和魂の人や蝶の春　高志

欧米人には、蝶も蛾も一緒。蝉の声は虫歯を削る音だとか。だが、中には、稀ながら、大の日本びいきもいる。日本の自然に感じ、伝統の文化を愛すること、大方の日本人が到底及ばない。本邦定住に至る人もいる。「和魂」とは、のみならず、いつも、自然に謙虚に、物事に真摯に取り組む心構えを言うの

ハガキ句二十四報（’０７／３／１２）

クレーンのアーム空切る余寒かな　孝三
古書房をめぐる老いらく二月尽　〃
野遊びの声かたまって曲りけり　たか子
下萌えや水神残る埋立地　妙子
鳩消えて波光の微塵ばかりなる　哲也

昆虫館（２／１６）

ファーブルは和魂の人や蝶の春　高志
蝶群飛のまま凍りつく昆虫館　陽一
昆虫記開いてありし春の昼　敏子
もろともに七転び糞ころがし（１０／２１）　孝三

ＢＳ俳句王国

納税期隣の犬の賢くて　敏子

昆虫館に再現されたファーブルの生家の前でガイドさんの話を聞いてゐて、大和魂のような根性を持った西洋人もいるものだと感動した。

だろう。「昆虫記」十巻の著者なれば、さもありなん。ファーブルが、もし、百年後に生まれていたら、加えて、「日本昆虫記」全十巻を著していたわけだ。快哉を叫びたくなる。

「や」の晴れやかさは、即ち、快哉の心である。飛び舞う蝶に瞠く眼である。いや、作者が蝶になったのかもしれない。ハ行音とア母音の繰り返しが明るく、和やかな春の気を伝えてめでたい。更に、上五結、脚「ル」の踏韻が潤いと輝きを添える。春である。「蝶の春」がうまい。

納税期隣の犬の賢くて　　敏子

ほかほか二月三月は　　人間さまにゃあ納税期
みんなだんまり気を塞ぐ　　一斉に苦虫噛みつぶす
わいのご主人お気の毒　　朝から晩まで働いて
お陰でおいらは果報者　　三食いんや二食昼寝つき
怪しい奴にゃ　　ただウー・ワン
西洋じゃ小屋の屋根さ寝て　　春風嗅いで夢心地
ほいとおいらもあやかった　　犬姫君の恵方クンクン

「隣」が不思議に利く。隣の犬でなければ句にならない。「隣」は魔法の杖ならぬ、魔法の壺。「臍」である。隣の親爺、商売は、さて、何だろう。

野遊びの声かたまって曲がりけり　　たか子

早春、原っぱいっぱいに子供たちが駆け廻る。一団の声が近づいて、又、遠のく。「かたまって」が子供らの動きを、一人々々の足取りまで見せてくれ、「曲りけり」が野原の広がりを伝える。作者は、近くの自宅か茶房にいて子供たちの声を聞きながら、何十年か前の自分の姿を目蓋にしている。

蝶群飛のまま凍りつく昆虫館　　陽一

初め、蝶が群れ飛ぶさま、そのままに、天井や壁に張りく光景を思った。が、それはない。たくさんの蝶が翅を全開した形で標本ケースに止められている、その情景だろう。「凍りつく」と見るのは、片面を埋め立てられた沼に羽折れの鳥の姿をダブラせる作者のやさしさである。ただ、整然とガラス張りケースの中に並べられた蝶の姿態は、ぼくの「群飛」のイメイジには馴じまない。蝶の群れが、翅をはためかせ、一面、飛び舞うさまを思う。想像力が足らないせいだろうか。

下萌えや水神残る埋立地　　妙子

都市郊外の光景である。こうして、残された自然も、やがて民俗の伝承も消えていく。なだて愛惜せざる”。だが、たとえ地面を舗装で覆われても、大地の力が失せることはい。作者は、「下萌や」と大地に

呼びかける。

鳰消えて波光の微塵ばかりなる　　哲也

「〜て」「波光」「微塵」「ばかりなり」と賑やか。語り過ぎではないだろうか。

今回、いい句ばかりだった。みんなレベルが高い。拙句二句が恥ずかしくなる。「余寒」と「古」の題詠だったが、詠題に引きずられるとは情けない。　敏子さんの「納税期」の句、前書に「ＢＳ俳句王国」とありましたが、ぼくは、もう何年か、同番組を見ていないため、気づきませんでした。出席されるか、投句が入選されたのでしょう。遅れ馳せながら、おめでとうございます。

はがき句管見の駄文をまとめてくださるとのお話し、それに値するか分かりませんが、大変、有り難うございます。最初の頃を除き、稿は保管しています。ただ、整理が悪く、収録が幾つかのフロッピーに散らばっています。それらを一括し直してお渡ししたいと思います。暫時、猶予いただければ幸いです。（H．19・4・2）

お便り広場（到着順、敬称略）

寒中見舞いというよりも、間もなくすぐ春ですね。

「白金葭」第23号拝受、有難うございました。御句〈初鏡尉の面に似て来る　高志〉いい句です。正に自画像？貴兄のお人柄を髣髴させます。小生、1／26日は、宇都宮「天馬句会」、1／27日は一日遅れで朝8時誓子句碑墓参、その足で「烏山句会」、1／28（月）は愛弟子の食道癌で入院中の友半寿氏の見舞い、2／1（金）は超結社「末広句会」自分の「大腸」の術後は「あらなんともなや」なのでご安心下さい。ではまた。（1．29佐藤宏之助）

前略「白金葭」二十三号有難く拝受しました。小生も飛鳥の地は何回か訪れましたので、貴兄の旧稿もなつかしく拝読しました。品牟遅和気命にちなんだお話も偶然の暗合とはいえ興味深く感じました。呼び名をペンネームにまでとり込んでおられるとは！相変わらずの駄弁同封しました。ご笑覧を。

（H25．1．30武者昭七）

今日は節分、午後から買物ついでに子の神さんの鬼やらいを見物して来ました。明日からは春ですね。いつも俳誌を送ってくださってありがとうございます。仕事場では、シフトが中々うまくゆかず、しばらくお休みさせてください。1，2，3，4号分として、2千円をお送りいたしますので宜しくお願い

いたします。（H．２４．２．３倉田紀子）

白金葭新年号拝受致しました。だんだんと高級となり縁遠くなった感じです。外宮で伊勢地方で檜をと植林して五十年、今年の遷宮には間伐材が少しは使用できるさうです。あと二百五十年すれば伊勢の檜で遷宮が可能ですと若い神官が云っていました。また興福寺の宝物殿ではいろいろの仏像の写真を売っておりましたが、ご本尊だけはありません。御本尊は親交の対象故写真は全くありませんとのことでした。また国立博物館で行列をつくった阿修羅像は仏教人気で女性達に合ったお顔とあって新聞ＴＶ等で大々的に宣伝されて東京と九州で百三十万？の見学者が出ましたとの話でジャーナリズムの力は多大ですねと云っておりました。俳句とは縁のない生活で反省しきりです。皆様の御活躍を祈ります。

（H.25２．11小山陽也）

会費同封古代は別便です。サヨリ字も知らず全くのデクの坊です。来月はなんとか五句つくりたいと願っています。９日は初午、１２日は我家の倒れんばかりの塀工事の打ち合わせ、工事がすめば一安心です。長屋璃子さんは大正十二年生まれ、今年九十歳です。声が若々しいのにビックリしました。曰く大正生れは元気なのよ　とのことでした。皆様によろしく益々の御活躍を。（H．25．２・12小山陽也）

先日の二月定例会では、お世話になりました。楽しい句会でした。日頃のご尽力に感謝します。まだまだ寒さは厳しく、悪い風邪がはやっています。ご夫妻ともども、ご自愛の上、ご清吟の程を祈り挙げます。（平２５．２・１９飯田孝三）

受贈誌（二月号）

人体に微弱電流犬ふぐり　（彩109号）　平野ひろし
春寒し百里隔てて被爆の地　（〃）　〃
霜月の皇帝ダリヤ木に伍せり　（〃）　佐藤惠子
寒卵もらいひし一つ未だ温し　（〃）　平山三郎
燈火親し夫は医学書われ俳誌　（〃）　河端不三子
川底の影は四倍水馬　（〃）　篠崎用平
風呂吹や月蝕既に進みをり　（雷魚93号）増田陽一
鮟鱇が剥れつつ見る街あかり　（〃）　〃
親鸞像足下に落葉吹き溜る　（薊100号）　森下流子
灯の入りし灯篭の屋根雪積る　（〃）　〃
城北の裏町三叉路石蕗咲けり（あすか2月号）　山尾かづひろ
居住ひを正し我が子の御慶かな（〃）　野木桃花

俳句評論纂

＊「あすか」二月号の**大江戸如月日記**（山尾かづひろ）は、またまた源氏物語の花宴（巻之八）の一節の解説を京橋の仕舞屋の番頭に語らせているかづひろさん流の説明文が載っている。弘徽殿女御の心持を語らせている。原文を読んでこれを読むとよく理解できるでしょう。この巻は、光源氏の「春鶯囀」という舞、それに「柳花苑」という舞を頭中将が舞う場面や、なんといっても、朧月夜との偶然の出会いと契り、その贈答歌の美しいこと、これはまさしく恋の歌。

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ（光源氏）
うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじとや思ふ（朧月夜）

こういう和歌は解説すると良さが薄まるので朗誦するに限る。

＊雷魚93号に陽一さんの「タイ国北部山地蝶紀行（5）」が載った。髭面のK氏と最奥地のチェンマラまで行った。車と徒歩で登り渓流を渡り、双尾蝶を蟹とパイナップルの匂いで誘う。後から来たS氏は初老だけれども、ケースにはキシタアゲハと銀白色の双尾蝶と赤いカラキセスなどたくさんとっているのにあきれた。陽一さんはそこで粘ってこの双尾蝶を二頭捕った。海老を掴んでいるような存在感があって、タイに来た甲斐があったと思った。Polyura eudamippus（ポリウラユダミップス）と云うのが学名とか。川の砂地には裾引揚羽が来ていた。変な蝶もとった。K氏が現れ「フタオチョウは採りましたか？僕はあとスソビキが採れればいい」。さっき陽一さんが取った場所を教えたが「でも僕はここで粘ります」と云って粘る。彼は東南アジアの何処かでスソビキを網に入れたが、取り出す手が震えてその憧れの蝶を粉々にしてしまったそうだと云う話を聞いて、人は見かけによらぬものと知った（続く）。

＊前号のお便り広場で紹介しましたが、青木啓泰さんがこの度茨城新聞の川柳選者になられました。それは、お友達の河野香苑さん逝去に伴い、乞われての後継になられたからです。香苑さんの句文集の十五枚分を校正するというかかわりのあった啓泰さんから『隣りはせせらぎ』という出来立ての分厚い本が私にまで届けられた。これが、実に面白い本です。『隣りはせせらぎ』の解説を啓泰さんが書かれている。ここを読めば、この本の性格がわかります。私見を入れてぐずぐず述べるのは憚られるので、「白波俳句錬成会」の俳句の中から香苑さんが選んだ句のいくつかを紹介するにとどめる。

稲刈の稲敷郡に稲がない　　青木啓泰
大根を煮て食う夜の寒さかな　　〃　〃
お祓いや地球の外で日が欠ける　　〃　〃
水洟を小出しにしている公民館　　〃　〃

水打っていやな奴から遠ざかる　　〃
水打って適当にがんばっている　　〃
猫飛んで本郷菊坂十三夜　　成井惠子
文化の日どの道ラーメン餃子かな　　青木啓泰

評言を読んでいると、句の評ではないではないかと思ってくるが、最後にちゃんと結び付けられているので心配無用なのである。因みに、お祓いやの句の評言を写して左に示す。

担当している「茨城川柳」の投句者を中心に募集した合同句集「茨城だっぺ川柳」には既に一六〇名の程の応募があり、11月発刊に向け現在まとめの最中だが、ベテランから初心者までごったで、それだけに味のある大句集が出来るかなと思っている。

茨城弁の「ちくだっぺ」の「ちく」の語源は「ちくら」つまり、どっちつかずの意で「いいかげん・うそ」の意味だそうだ。茨城では標準語で通る「ごじゃっぺ」も古く釈迦のいとこダイバダッタが説いた戒律「五邪の法」が語源とかで、この禁欲的な五つの戒律は釈迦が「厳しすぎる」とのことで認められず「五邪」つまりはでたらめとの意に陥落したという。人気上昇中の茨城弁が、お祓箱になんねためにも代表格である「ちくだっぺ」「ごじゃらっぺ」など、この際きちんとお祓いを受けて「いがったっぺ」にすっぺや。お天道さまがかくれっこしているうちに。

作者の句意に合致しているかどうかに関係なく、香苑さんは、日蝕の最中に茨城弁がお祓いを受けて、お払い箱にならぬようにしたいものと願望を述べられた。啓泰さんは、日本人の魂を失いかけている現代の日本、いや世界中が、地球が、お天道様がお隠れになっているうちに、お祓いを受けて、穢れを除きたいものよという句意だと思う。天の岩戸の古事を踏まえているに違いない。

思い出すのは、私が筑波学園都市へ勤務していた頃のこと。地元の職人さんにお世話になったこと。「光成さん、々々」とよく言ってもらったが、時々茨城弁が雑じって、私のわからない言葉も発せられて、それは？と聞くわけにもいかず、弱ったことがよくあった。真夏の戸外の作業の時、巴旦杏を持ってきてくれ、これをかじりながらに限ると私にも呉れた。茨城弁の抜けない研究員を課長に出来ないとか、なんとか噂を聞いたことがある。書いていると切りがないので、ここで打ち切ります。

＊「薊」主宰の森下流子さんの「巻頭言・随筆集**流水**」を戴いた。薊百号を総括する文章を纏められて出版されたもの。「吾かく戦へり」は本誌でも要約を紹介させていただいたので、親しみがある。改めてこの本の紹介をする。濃紺布地地味の硬表紙本の中表紙には流子さんの現在の写真と若かりし頃の写真

それに駆逐艦「太刀風」の写真が掲載されている。真にもののふの面魂である。現代的に云うと、ハンサム、凛々しい男性というのであろう。このお顔だけでも、どのような文章を書かれどのような俳句を作られるか想像できるというもの。薊会員に向けての巻頭言は流子さんのいわば俳論が述べられている。随筆のトップには芭蕉考が次に一茶考、三番目に遊女俳人哥川、４番目に多佳子抄が書かれてある。私の「芭蕉の軽み以後」もそこまで及びたいと思っているので、参考に致したいと思います。芭蕉が等栽を訪ねるところ、源氏物語の夕顔の巻を下敷きにしていることなど、地元の越前を舞台にした奥の細道考となっている。流子さんは海軍軍人さんというイメージがあるが、誓子門の真の俳人であります。

＊田中哲也遺句集「水馬」を陽一さんから戴いた。すでに孝三さんの抽出句を前報に示した。

マサ子夫人のあとがきを読むとこの句集の上梓に尽力された俳友の支援がよくわかる。陽一さんのエッチングが表紙にある品格のある句集である。栞には陽一さんはじめ五人の俳友の思い出が書かれており、本誌の跋には高野ムツオ主宰（小熊座）の哀悼文がある。私も長い付き合いにて、我孫子、柏での「例の会」の吟行句会で一緒だったので、左に抽出句を挙げ、更に、いささかの思いを書いて追悼とする。なほ、本誌を創刊の前々年哲也は自死した。地元の仲間と追悼句会をして、哲也に皆別れた。

湯島通ればかの青鮫を思い出す
いくつもの滝見ゆるなり滝の中
炎昼の石を絞ってみたきかな
平成やプールに硬き面などなし
初秋の舳先に縄のとぐろ巻き
わが虚無を旨しうましと牛蛙
定食の幟はたはた敗戦日
母はもう電話に出ないあけびの実
水深に似たる孤独や石蕗の花
桑の実やいつしか父を敬ひゐし
束の間の昭和なりけり蓮見舟
雲の影稲の穂波を渡り来る

以上私の記憶にある私のわかる句を抜いた。はっきり云って、哲也は難しい私のような単細胞の頭には分からない句ばかり作っていた。季語は無限、人間の思いは有限、思いを述べる句を作っていると、限界がある。自然に没入する如く自然を客観的に描写し季感を陳べるのが俳句と私は誓子先生から学んでいたので、哲也にそういう作り方をしていると行き詰るよと、呟いたことがある。亡くなる年の初め、「俺はホトトギスのような作りかたにするよ」とか私に云った覚えがある。哲也と俳誌でもおこそうと言いそびれていた矢先、訃報が届いたので、勝手に結論を出しちゃって、と一瞬思った。そういう記憶

がある。追悼句会報を今更紹介しないが、残念な気持ちは、ずっと尾を引いているのである。

芭蕉のかるみ以後（23）　光成高志

若き芭蕉、宗房の仕えていた蝉吟が元気な頃の寛文五、六年頃の俳句を「続山の井」に入集された句から独自性が早くも現れているという視点で見てきたが、これをまだ続ける。

時雨をやもどかしがりて松の雪　宗房

時雨が長い間続いている時、朝目を覚まして見ると、松の枝に雪が積っていて、それがいかにも美しく見えたので、宗房は、「時雨」を「雪」が「もどかしが」って、自分で降って来て、松の上に積り、あたりを俄然美しくしたと、雪を擬人化したものである。擬人化は今でも嫌われることがあるが、もどかしがっていたのは、作者であり、作者が松の雪の美しさによって、長く続いた時雨から救われた気がしたと解釈すれば、擬人化も納得できる。時雨が雪に変わって松の枝に積っている美しさは今の我々もしばしば体験することで、こういう表現が古臭いとは思えないのである。

しほれふすや世はさかさまの雪の竹　宗房

「子におくれたる人の本にて」という前書がある

から、子供をなくした人のところへ行って詠んだ追悼の句である。ひょっとして、蝉吟に先だたれた良清に捧げた句かもしれない。雪が積った竹は、撓んで、萎れ臥し、節が逆様になっているように、子供に先立たれた親から言えば、「世はさかさま」になった感じである。そのため、その親は「しほれふす」より仕方がない。それを雪の竹によって追悼の句としたのである。「子に先だたれた親の悲しみ」を「雪撓れ伏した竹の姿」で表現したのであって、相手の心持の中に入って、相手の悲しみに同情する宗房の心の濃やかさが感じられるのである。「考える」の語源は、相手と身を交すことといわれるが、後に、「松の事は松に習へ」という赤冊子の警句に通じる芭蕉が既にここにいる。芭蕉は、蝉吟に仕えて、謡に触れ、季吟の『伊勢物語拾穂抄』を読み、主君の使いとして京の季吟の下へ往復するという特別な境遇にいて、俳諧の才能をどんどん磨いていったのではなかろうか。十代の優秀な才能は真如の月が照るように皓々として、一度聞いた事、読んだことが皆記憶されて行ったのである。それを、作品に表現できる喜びは宗房が意識せずとも体感していたに違いない。先の作品を読むと、季吟の教えの枠内とは言え、その中で工夫して、己の実感がすっと入ってくる自在さに、若き芭蕉自身が驚いているとさえ思われる。朝、目覚めて、俳諧の中に生きることが出来る喜びが胸に湧き上がってくる日々を過ごしたのではなかったか。又、伊賀と京との往復の旅は、使者として

の務めではあったが、道中の風土に触れて後の旅の人生の淵源になったのではなかろうか。

我孫子日記

1／23ＳＯＡ。1／25ＫＫＲ。1／27松戸から水元公園歩き。1／30ＳＯＡ。2／1上野、新宿（円空仏から源氏物語）。2／3節分豆拾い。2／6ＳＯＡ。2／8青山＊萱吟行句会。2／11東京駅から有楽町。2／13ＳＯＡ。2／15定例会。

＊煙管手に見返る美人春袷　たけ子

浅草の十二階見ゆ春一番　こい乃

春なれや子の刻までも外遊び　順子

太鼓橋幼子の絵春疾風　義子

版木みな乾ききったる余寒かな　敏子

靴はいて行灯袴卒業す　高志

原稿募集

今回、幸一さんから、松村蒼石の短冊と幸一さんの氏に纏わる文章をたくさん頂きました。原稿が増えたので、二十頁に挑戦しようとしましたが、ここで16頁に達しましたので、ストックして置きます。原稿は無制限に受けます。どうか、気が向いた時お寄せ下さい。打込みは熟読に似て楽しいものです。

編集後記

芭蕉の二十代を想像している。学問の盛んな時代であったのだ。中江藤樹と四年同時代人であったし、伊藤仁斎、荻生徂徠、新井白石とも同じ時代を生きている。立ち木にも仏像を彫った円空も同じ。西鶴もそうである。蕪村や一茶は五十年、百年あとの人である。「天下の間に己一人生きてあると思うべし」は藤樹の言葉。古学を熟読することが学問をするということであった。しかも独学である。芭蕉も謡、禅、漢学、歌学みな読んで身につけていたのだ。よくよく考えてみようと思っている時、郷里の児童文学作家の皿海達哉さんから、最新の作品が届いた。小学生向きに三冊に分かれている。大急ぎで彼の作品を読んだ。季語をうまく筋に溶け込ましてあって、いいと思います。3～4年生用の「願いの小石」は、先のＮＨＫＴＶの「八重のさくら」にそのシーンが出てくる。確か宮崎の鵜戸神宮の前の大岩に石ころを投げて乗っかれば願いが叶うという鳥居ならぬ運岩があった。こういう謂れは大切にしたいものだ。1～2年生用作品のロバとペリカンの取り合わせは面白い。目高を嘴の袋に飼っているとは、よくぞ想像されました。ここに一寸紹介するのもどうかと思いましたが、お孫さんに読ませたい作品と思いましたので、今度の句会で皆さんにお見せします。

発行者：光成高志　発行所：270－1119 我孫子市南新木２－１４－１７